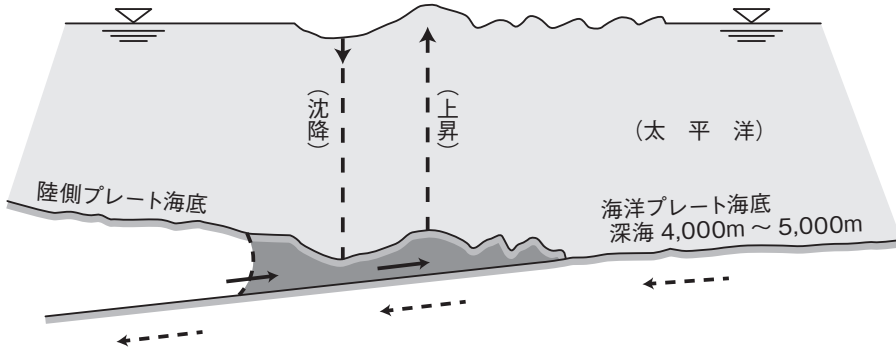


図18 津波発生の説明図



陸側プレートと海洋プレートの2つのプレートの大規模なズレが、海底50kmより浅いところで生じると、むろん、大きな地震になるのですが、海底岩盤の広い範囲に^{へんじょう}変状をきたすことにもなります。つまり海底岩盤の一部は水平方向に広く、大きくすべり、垂直方向にも大きく盛り上がったり、^{ちんこう}沈降したりするのです。この上には海水がのっているわけですから、この海底の^{きゅうげき}急激な変状に合わせて、海水も上下、左右に動き出すこととなります。

まさに、この状態こそが津波の発生ということになります。

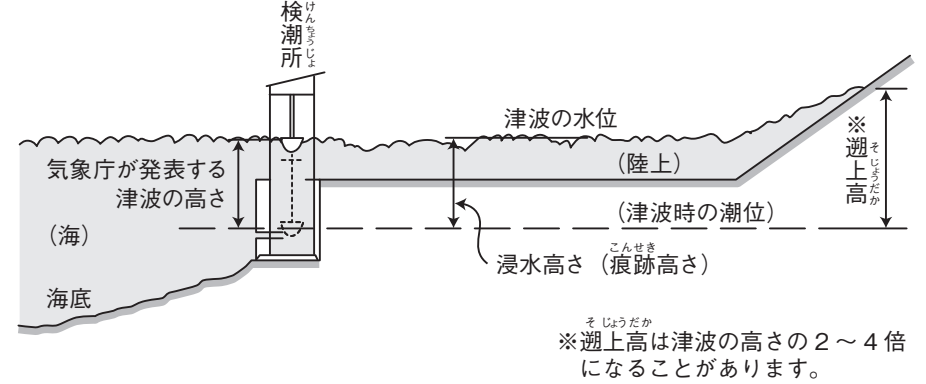
(2) 津波の高さ

正確な津波の高さは、後日^{けんちょうじょ}検潮所の観測記録や陸上の^{こんせき}痕跡等により、

^{へんじょう}変状：普通とは異なった状態。
^{ちんこう}沈降：地面が海面に比較して低下すること。
^{けんちょうじょ}検潮所：気象庁が設置している、基

準面から計った海面の高さである「潮位」を測る施設。
^{こんせき}痕跡：以前に何かがあったことを示すあと。

図19 津波の高さの検測



判断されます(図19)。

太平洋の沖合いの水深の深いところでは、津波が高さ1~2m程度で、ものすごいスピードで通り過ぎていきます。この津波は、陸に近づき、水深も浅くなるにしたがって進むスピードも落ちる一方、津波の高さが増してくるのです。たとえば、津波の高さは、浜辺から沖合いをみてみえる範囲の2~3km沖合いでは、それまでの津波の高さの5倍程になるといわれています。

気象庁から当初発表される津波の高さは、数多くのケースのシミュレーション結果をデータベースとして蓄えられていますので、短時間に津波到達時の予想高さを出していますが、^{ごこく}後刻に修正することもあり得るのです。

実際にも、地域、地区による津波の高さの変化は、^{まえはま}前浜の海底が急こう配だったり、地形上奥行きのある湾だったりすることに影響を受けています。

^{ごこく}後刻：しばらく時間のたったのちのこと。
^{けんちょうじょ}検潮所：気象庁が設置している、基

^{まえはま}前浜：波が寄せたり引き返したりするところ。集落の前の浜。